

## ウイグル語における再帰態を表す動詞

藤家洋昭 (大阪大学)

### 1. はじめに

ウイグル語 (Uyghur Tili) には、ウイグル語伝統文法[1][2]にもとづく 5 つのボイス (derije) があるとされていて、その一つに再帰態 (özlük derije) がある。

従来、ウイグル語伝統文法にもとづく研究では、再帰態は「自分を～」を表す意味を持つとされるだけで、それ以上の詳しい記述はないように見受けられる。

本研究では、近年の言語学における知見をとりいれ、それらの知見にもとづいて、従来、ウイグル語の記述において再帰としてひとまとめにされていたものが、少なくとも 3 つに下位分類できることを示す。

### 2. 基本データと考察

ウイグル語伝統文法では、ウイグル語には 5 つのボイス (derije) があるとされていて、その一つに再帰 (özlük derije) がある。ウイグル語は膠着語的性質が強い言語で、動詞のボイスも、膠着語的性質をもつ言語の多くが接辞と意味の対応が明確であるのと同じように接辞によって表され、基本的には接辞を付けることによって得られる動詞によって表される。例えば使役態であれば、使役を表す接辞を付けた動詞によって、また受動態であれば受け身を表す接辞を付けた動詞によってそれらのボイスの文が表される。

なお、ウイグル語伝統文法では、本研究で議論する動詞の形と意味について、主にボイスという観点から分析され、動詞の形という点での言及がない。本研究では、ウイグル語伝統文法でいう再帰態を表す動詞のことを、以下、「再帰形の動詞」と呼ぶことにする。

#### 2.1 再帰態

再帰態というボイスは、少なくとも日本語等の言語においてはあまりなじみがない。ここでは、ウイグル語伝統文法において再帰態がどのように定義されているかを、ウイグル語伝統文法の集大成といえるべく先行研究[1]においてどのように記述されているか見る。

「文の文法的主語が動作の実行者であり、同時に動作の受け手であることを表す。[[1]:p.1617]」

この定義によれば、

#### (1) U daim maxtinidu.[1]

彼・いつも・自分をほめている「彼はいつも自慢している。」

というデータでは、動作の実行者と動作の受け手はともに "u"「彼」であり、動作の実行者が動作の受け手をほめる、という意味であると解釈される。本研究においても、再帰態が表す基本的意味については、この先行研究にもとづく。基本的意味以外については後述する。

#### 2.1.1 再帰態を形成する形式

ウイグル語において再帰形の動詞がどのように形成されるかを見る。

ウイグル語の再帰態を表す動詞は、動詞語幹に *-il*, *-in* 等の形式を付けることによって得られる動詞によって表される[1]。本研究では、これらの動詞のことを先でも触れたように再帰形の動詞と呼ぶ。

例: *maxtan-*「自分をほめる、自慢する」(*maxta-*「～をほめる」), *yuyun-*「自分を洗う」(*yu-*「～を洗う」), *teyyarlan-*「自分を準備する、身支度する」(*teyyarla-*「～を準備する」), *qoshul-*「自分を加える、加わる」(*qosh-*「加える」), *éçil-*「咲く」(*ach-*「開く」)

再帰態を形成する形式である *-il* と *-in*

の違いが何によるものかは、先行研究[1]においてもこれら形式の違いについては当然気づかれているが、分布の条件については言及がなく、明らかにされていない。本研究においても、-il と-in の違いそのものについてはこれ以上触れないが、これらの形式の分布の条件が明らかでないということについては、ウイグル語における他のボイスを表す形式の場合と異なる。他のボイスの場合は、完全ではないにしろ、概して音韻的条件により形式の分布が条件づけられる。

なお、再帰態を表す文は、構文的には他のウイグル語の動詞述語文と語順に関して基本的な違いは見られない。

## 2.2 再帰文の具体例

再帰形の動詞が用いられた動詞のデータを見る。なお、本研究で取り扱うデータは、特に言及がない限り現地調査により母語話者から直接採集したものである。

### (2) U daim maxtinidu.[1] = (1)

彼・いつも・自分をほめている「彼はいつも自慢している。」

### (3) Tursun yolgha chiqishqa teyyarlandi.

トルスン(人名)・旅立ち(与格)・自分を準備した「トルスは旅立ちのために身支度をした。」

これらの文は、意味的に「自分を」含み、例えば、(2) であれば、他動詞を用いて次のように書き換えることができるとされている[1]。

### (4) U daim özini özi maxtaydu.

彼・いつも・自分を・ほめている「彼はいつも自分をほめている。」

ここまでをまとめると、ウイグル語の再帰態は動詞語幹に -il/-in 等の形式をつけることによって形成され、意味的には「自分を」を表す。

## 3. さらなるデータと分析

### 3.1 分析の枠組み

本章では前章でとりあげたデータにさらなるデータを加え分析する。分析の枠組み

には主辞駆動句構造文法 (Head-drive Phrase Structure Grammar: HPSG) と語彙概念構造 (Lexical Conceptual Structure: 以下 LCS と呼ぶ) を用いる。

LCS には、研究者よる、あるいは、同じ研究者によるものでもバージョンによる違いがあるが、本研究では先行研究[6]にもとづき、次の基本述語を前提にしている。

CAUSE: 外的な誘因が対象物の変化を引き起こすことを表す。

ACT: 継続的あるいは一時的な「活動」を表す。主語の意思によって活動のはじめと終わりを決めることができる。

ON: ACT と一緒に用いられると働きかけの対象を示す。

BECOME: 「変化」を表す。

BE: 静止した「状態」を表す。

AT: BE と一緒に用いられて、抽象的状态、物理的位置を示す。

これら基本的述語の組み合わせにより、具体的な語は次のようになる。

活動自動詞: [1]ACT]

働きかけ他動詞: [1]ACT ON-[2]

変化自動詞: [ BECOME [2] BE AT-[3]

使役他動詞: [[1] ACT ON-[2] CAUSE [BECOME [2] BE AT-[3]]]

なお、本研究では、先行研究[5]にならい、LCS における項はあくまでも意味論的な値であり、統語的な項とは別のものであると考えている。統語論的な項は、主辞駆動句構造文法(Head-driven Phrase Structure Grammar: HPSG)[4] の枠組みにおける語彙項目の中の ARG-ST の項として記述される。したがって、LCS の項は、統語構造には直接写像されない。

なお、他動詞には前述のとおり一般的な観点から意味的に働きかけ他動詞と変化他動詞があることが知られている[6]。

### 3.2 分析

まず、2 章でとりあげたウイグル語における再帰形の基本的なデータを分析する。ウイグル語伝統文法での考察によると、再

帰態は意味的に「自分」が含まれたものである。ほぼ同じ意味の書きかえを見ると明らかに他動詞文になっている。

(5) U daim maxtinidu.[1] = (1)

彼・いつも・自分をほめている「彼はいつも自慢している。」

対応する他動詞文は次のとおりである。

(6) U daim özini özi maxtaydu.[1] = (4)

彼・いつも・自分を・ほめている「彼はいつも自慢している。」

これらにもとづくならば、前章でとりあげたデータのうち、maxtan-「自慢する」等は他動詞の意味構造に近いものとして次のように分析できる。

ここで重要なのは「自分」という意味である。(5)においては、「自分」が形として現れていない。このことをもとにして、対応する他動詞文をもとに意味構造を考える。

[1]ACT ON-[2]

ただし、上記のデータに即する限り、[1]=u「彼」、[2]=oz(i)「自分」を表す。

再帰態の文の方も意味的には同じであると考えられるので、LCSも基本的に同じものであると考えられる。しかしながら、再帰態の文においては、ACT ONの対象は常に一定で他の可能性がない。したがって、再帰態で用いられる動詞、すなわち再帰形の動詞は、次のようなLCSを持つと考えられる。

[1]ACT ON-[1]

### 3.2.1 項構造とのリンク

このように、ウイグル語の再帰形の動詞が持つLCSは、他動詞のLCSに近いものである。しかし、繰り返しになるが、再帰態の構文は他動詞構文ではない。統語上、目的語は一切現れない。これは、再帰形の動詞と他動詞では項構造とのリンクに違いがあるからだと考えられる。他動詞については、先行研究[5]では、次のような語彙情報を持つことが示されている。

ARG-ST [EXT <[1]:[3]>, INT <[2]:[4]>]

LCS [[3]ACT ON-[5] CAUSE [BECOME

[4]BEAT-[6]]

ただし、これはいわゆる変化他動詞のものと考えられ、働きかけ他動詞であればCAUSE以下のない次のようなものになると考えられる。

LCS [[3]ACT ON-[5]]

これにもとづくると本研究によるmaxtan-等の再帰形の動詞の語彙情報は次のようになる。

ARG-ST [EXT <[1]:[3]>, INT <>]

LCS [[3]ACT ON-[3]]

[3]は外項とのみリンクされ、内項はなく、「自分」を意味する要素が統語的に現れることができない。

### 3.3 残るデータの分析

以上、maxtan-などの動詞を記述した。しかしながら、再帰態に関するデータのすべてが前述のように分析できるわけではない。本節では伝統文法では再帰として扱われているものでmaxtan-等とは異なる性質を持つと考えられるものをみていく。

#### 3.3.1 taran-

taran-という動詞も伝統文法では再帰として扱われている。対応する他動詞は、tara-「(髪を)とく、けずる」である。taran-は、「自分の髪をとく、けずる」という意味になるが、実際の対象になっているのは、「自分」ではなくて「自分」の部分あるいは持ち物と考えられるものである。そうであると、「自分を~する」という意味の再帰形の動詞とは意味が異なることになる。

#### 3.3.2 échil-

以上みてきたように、再帰形の動詞はそれを用いた文に対応する他動詞文が存在する等、他動詞との関連を指摘することができる。

ところが、échil-に関する次のような例は、対応する他動詞文を考えることが難しい。

(7) Gül échildi.

花・開いた「花が咲いた。」

(8) \*Gül özini ahti.

花・自分を・開けた

これら *éçhil-*に関するデータについてさらにほりさげて考察・分析する。

繰り返しになるが、(7) の *éçhil-* に関するデータは先行研究[1]では再帰態として扱われている。

先にあげた *maxtan-* のような動詞については、対応する他動詞が存在し、言い換えが可能である。この点において、*éçhil-* は、他の再帰形の動詞とは異なる性質を持つということが言える。

ここでは、*éçhil-* が他の再帰形の動詞と異なる性質を持つということについて、*...ning qilghini* 「～がしたこと」に言い換えることができるかを考察してさらに検証する。

(9) *Uning qilghini maxtinish boldi.*

彼の・したこと・自慢すること・だった  
「彼がしたことは自慢することだった」

(10) \**Gülning qilghini éçhilish boldi.*

花の・したこと・開く・だった

この点においても他の再帰形動詞とは異なったふるまいを示す。この性質について、*yagh-* 「降る」等の非対格動詞との共通性を示しているといえる。*yagh-* 「降る」については次のようになる。

(11) *Qar yaghdi.*

雪・降った「雪が降った。」

この文を *-ning qilishi* に書き換えると非文になる。

(12) \* *Qarning qilghini yéghish boldi.*

雪の・したこと・降ること・であった

*yagh-* は、非対格動詞として次のような LCS を持つと考えられる。

[BECOME [ <sub>2</sub> BE AT <sub>3</sub> ] ]

*éçhil-* は、そのふるまいから、他の再帰形の動詞とは違い、*yagh-* と全く同じである次のような LCS を持つと考えられる。

[BECOME [ <sub>2</sub> BE AT <sub>3</sub> ] ]

すなわち、*éçhil-* は他の再帰形に属するとされる動詞とは性質が異なり、非対格動詞と分析するのが妥当である。

#### 4. 結論

ウイグル語における再起態を形成する動詞の意味を考察・分析した。

本研究の結果、再帰態を形成する動詞が表す意味は、少なくとも三つに下位分類できるが明らかになった。

対応する他動詞文があり、目的語の意味が「自分」であるもの。

対応する他動詞文があり、目的語の意味が「自分」そのものではないもの。

非対格構造を持ち、対応する他動詞文がないもの。

#### 参考文献

[1] Arslan Abdulla (ed.). (2010). *Hazirqi Zaman Uyghur Tili*. Ürümchi. Shinjang Xelq Neshriyati.

[2] Arziyev R. (2006). *Uyghur Tili*. Almota. Mektep.

[3] Muallim. *MP900*. Ürümchi. Muallim.

[4] Sag I. A. & Wasow T. (1999). *Syntactic Theory: A Formal Introduction*. CSLI.

[5] 今泉志奈子・郡司隆男 (2002), 「語彙的複合における複合事象」伊藤たかね(編)『文法理論:レキシコンと統語』東京大学出版会.

[6] 影山太郎 (1999).『形態論と意味』くろしお出版.